

資 料

OSCEに参加した1年次看護学生のコミュニケーションに関する学び

水野 妙子*, 阿部 恵子*, 松田 武美*

First-year Nursing Students' Learning about Communication
after Participating in the OSCE

Taeko MIZUNO, Keiko ABE and Takemi MATSUDA

Kinjo Gakuin University, Department of Nursing, Faculty of Nursing

Key Words : OSCE, コミュニケーション, フィードバック, 看護基礎教育, 模擬患者

OSCE, communication, feedback, basic nursing education, standardized patient

要 旨

目的：コミュニケーションを重視した看護技術を評価するOSCEを実施し、看護基礎教育における1年次学生のコミュニケーションに関する課題からの学びを明らかにした。

方法：看護学学士課程1年次学生50名を対象として模擬患者参加型OSCEを実施し、終了後に質問紙調査を実施した。「コミュニケーションに関する自己の課題としてどんな学びがあったか」について内容を抽出し、質的に分析した。

結果：50名全員から記述を得た。OSCEにおけるコミュニケーションに関する自己の課題に対する学びとして、【非言語コミュニケーションの効果】、【コミュニケーションの場の調整】、【コミュニケーションの目的の明確化】、【コミュニケーション内容とプロセスの意識化】、【対象の疾患や病状への理解】、【生活者としての対象のニーズの把握】、【対象・状況に合わせたコミュニケーションの工夫】の7カテゴリーが生成された。

考察：看護基礎教育における早期からのコミュニケーションを重視した看護技術のOSCEによる形成的評価は実践的な教育につながり、学生の看護技術実践の際のコミュニケーションスキル向上につながるということが示唆された。

Abstract

Introduction: This study aimed to clarify what first-year nursing students learn about Communication in basic nursing education through an Objective Structured Clinical Exam (OSCE) that focusing on communication during nursing skills.

Methods: The OSCE was conducted for 50 first-year nursing students with a simulated patient. A questionnaire survey was administered after the OSCE, and the content was qualitatively analyzed regarding "the lessons learned as self-addressed issues related to communication".

Results: All 50 first-year nursing students responded to the questions. Seven categories were identified as learnings regarding Communication for nursing students: [Effectiveness of nonverbal Communication], [Adjusting the communication environment], [Clarifying the purpose of Communication], [Awareness communication contents and processes], [Understanding the subject's illness and condition], [Understanding the subject's needs as a consumer], and [Communication devices tailored to the subject and the situation].

Discussion: Formative assessment using the OSCE, which focusing on communication with nursing techniques early in basic nursing education, leads to practical education and facilitates educational effects for improving students' communication skills.

* 金城学院大学看護学部看護学科

I. 緒 言

価値観の多様化や情報過多の現代社会において、医療におけるコミュニケーションは患者の適切な意思決定支援に重要な役割を果たしている（宮脇，2021）。コミュニケーションとは言語、あるいは言語によらないメッセージのやり取りを通して、ある個人が他の個人や集団に対して相互理解や相互関係を成立させたり、ある目的のために影響を及ぼしたりするために、情報やその意味を適切に伝達し共有する行為、手段および過程である（馬場，2021；日本看護科学学会，*n.d.*；鈴木，2025）。

近年、ICT（Information and Communication Technology）化による対人関係の希薄化が指摘されており、看護学生においてコミュニケーション能力の低下が懸念されている（厚生労働省，2019；玉木，2017）。看護基礎教育ではコミュニケーション能力の向上に向けた取り組みが重要視され、模擬患者（SP：Simulated Patient）を活用した実践的教育が推奨されている（厚生労働省，2011）。SPは医療系学生のコミュニケーションスキルなどの向上を目的として活用され、相手の感情を認識し尊重することや個性性を考慮した対応の必要性、価値観の多様性への気づきなどの教育効果が報告されている（肥後，2005；堀，2004；黒澤，2021；山本，2019）。また、標準模擬患者（SP：Standardized Patient）は専門的な訓練を受けた患者役を演じる人のことを指し、OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）や実習、研修会等で活用されている（鈴木，2025）。

看護基礎教育においてもOSCEの導入は増加傾向であり、学生の学びの成果として自己の学修課題の明確化、課題解決に向けた行動、主体的な学修姿勢などが示唆されており、その導入目的のほとんどは看護実践能力および看護技術の評価である（小西，2013；高島，2021）。看護技術とは、『看護の問題を解決するために、看護の対象となる人々の安全・安楽を保証しながら、看護の専門的知識に基づいて提供される技であり、またその体系をさす』と定義され、「看護過程を展開する技術」、「対人関係の技術」、「生活援助技術」、「診療に伴う援助技術」、「身体ケアを提供する技術」、「認知・情動へ働きかけ

る技術」、「環境に働きかける技術」などに類別される（日本看護科学学会，*n.d.*）。この類別に基づき、OSCEに関する先行研究（柏木，2021；高島，2021；津田，2023）を分析すると、評価の主軸は「生活援助技術」および「身体ケアを提供する技術」に置かれており、コミュニケーションはこれらに付随する副次的な評価要素として位置づけられる。一方、SP参加型のコミュニケーション演習においては、主に「対人関係の技術」に焦点が当てられ、その多くは情報収集を通じた対象理解を重点に置いた面接形式が採用されている（堀，2003；藤野，2021）。しかし、このような演習ではコミュニケーションによる情報収集が主たる目的とされ、対象に対する身体的なケアや生活援助の実施は含まれていない。

このように、看護基礎教育の現状として、対象への実践的ケアである「生活援助技術」および「身体ケアを提供する技術」と、コミュニケーションによる対象理解に重点を置いた「対人関係の技術」は独立して教育されている。実際の臨床現場では、対象との対話を通じて信頼関係を築き、情報収集を通して対象理解をしながら身体的ケアや日常生活援助を提供し、対象に安心感を与えることが求められる。そこで、看護基礎教育における新たなアプローチとして、低学年の早い段階より、学生がSPとのコミュニケーションにより身体的および日常生活におけるニーズを把握し、それに基づいた日常生活援助を提供するOSCEを実施した。本研究は、看護基礎教育における1年次学生に対してコミュニケーションと日常生活援助を統合的に評価および育成することを目的としたOSCEにおいて、学生のコミュニケーションに関する課題からの学びを明らかにすることを目的とした。

II. 方 法

1. 対象者および調査時期

本研究の対象者は、SP参加型のコミュニケーション教育を取り入れた看護コミュニケーション論、基礎看護生活援助技術演習および基礎看護診療援助技術演習、基礎看護学実習（1）を履修したA大学看護学学士課程1年次学生108名の内、同意を得た50名とした。調査は2023年2月に実施した。

2. 調査方法および分析方法

対象者に模擬患者参加型OSCEを実施し、終了後に質問紙調査を実施した。

1) OSCE

本研究では、2課題のSP参加型OSCEを実施した。OSCEは形成的評価とし、評価者およびSPよりフィードバックをすることにより学修途上にある学生の看護実践能力の向上を目的とした。OSCEの課題として、①脳梗塞後片麻痺患者（70歳男性）への情報収集と環境整備、②軽度認知症患者（80歳女性）への情報収集と車いす移乗の介助としてシナリオを作成し、1課題20分で学生がSPに対して情報収集および看護技術を実施した。

2) 調査内容および分析方法

2課題のOSCEおよびフィードバック終了後に、自記式質問紙調査を実施した。質問紙は自由記述回答とし、「コミュニケーションに関する自己の課題としてどんな学びがあったか」について内容を抽出し、類似性によってサブカテゴリー化およびカテゴリー化を行い、ネーミングした。

3. 倫理的配慮

本研究は、A大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認（番号 R22034号）を受けて実施した。なお、倫理的配慮として、対象者の募集は授業外に実施し、研究参加の有無が授業等の成績判定時に影響しないことを説明した。また、対象者の自由意思による研究参加を保証した。

Ⅲ. 結 果

A大学看護学学士課程1年次学生50名（19.0±0.9歳）全員から記述を得た。OSCEにおける看護学生のコミュニケーションに関する学びとして81の記述を抽出し、19のサブカテゴリーと7つのカテゴリーに分類した。学生は、【非言語コミュニケーションの効果】、【コミュニケーションの場の調整】、【コミュニケーションの目的の明確化】、【コミュニケーション内容とプロセスの意識化】、【対象の疾患や病状への理解】、【生活者としての対象のニーズの把握】、【対象・状況に合わせたコミュニケーションの工夫】の学びを得た。（表1）。カテゴリー名を【 】, サブカテゴリーを「 」、実際の記述を‘ ’として説明する。

1. 非言語コミュニケーションの効果

学生はOSCE実施後のSPおよび評価者からのフィードバックにより、【非言語コミュニケーションの効果】の重要性を認識した。このカテゴリーは5つのサブカテゴリーで構成された。

学生は‘表情がかたいと2事例とも指摘されたことと、自覚もあるため、対象者と接する時にはより穏やかな表情で接することを意識したい’、‘笑顔、声をほめてもらえたので、良さを生かしていきたい’といった「柔らかい表情での対応」、‘一つ一つの動作や確認が、相手に与える印象などに大きく影響を与えることを学び、相手が不快にならない接し方を心掛けたい’、‘患者の立場に寄り添い話をしたい’といった「寄り添った態度の重要性」について、SPや評価者のフィードバックから自己を振り返っていた。また、‘緊張していることがひしひしと伝わってきたと教えてもらったので、緊張していることが伝わらないようにしたい’、‘緊張すると早口になってしまうので、ゆっくり話すことと、間を作ることを意識して関わっていききたい’などの「自己の緊張感が表出しない対応」の重要性を認識した。さらに、‘声の大きさやトーン、話すスピードについてアドバイスをいただいたので、高齢の患者と接するときに生かしたい’、‘声のボリュームに気を付ける’といった「声の適切性」、‘触れてくれてうれしかったと言っていただけで話の仕方は、これからも使っていきたい’といった「効果的なタッチング」について、フィードバックによって意識化された。

2. コミュニケーションの場の調整

学生はSPとのコミュニケーションを通して、【コミュニケーションの場の調整】の必要性を学んでいた。このカテゴリーは2つのサブカテゴリーで構成された。

学生は‘場と環境を客観的に見られるようにする’、‘入室の際にもっと周囲を見る’など、「コミュニケーションの場の把握」の必要性に気づいた。また、‘会話以外にも気が遣えるようにしたい’ことにより‘患者が話しやすい状況を作ることが大切だと感じた’など「コミュニケーション環境の調整」をする能力も必要であることを認識した。

表1 OSCEにおける1年次看護学生のコミュニケーションに関する課題からの学び (1)

カテゴリー	サブカテゴリー	実際の記述
非言語コミュニケーションの効果	柔らかな表情での対応	“表情がかたい”と2事例ともに指摘されたことと、自覚もあるため、対象者と接する時にはより穏やかな表情で接することを意識したい
		笑顔をはめていただいたので、日ごろから大事にしたい
		笑顔、声をほめてもらえたので、良さを生かしていきたい
	寄り添った態度の重要性	やさしい雰囲気や声などを意識する
		一つ一つの動作や確認が、相手に与える印象などに大きく影響を与えることを学び、相手が不快にならない接し方を心掛けたい
		患者の心身の状態をしっかり理解して、患者の立場になってどういう声掛けをされたいか自分に置き換えて考えてからコミュニケーションを取る
		患者の立場に寄り添い話をしたい
	自己の緊張感が表出しない対応	気遣いができていると言われたので、今後の実習で生かしていきたい
		相手の目を見て話を聞く
		緊張していることがひしひしと伝わってきたと教えてもらったので、緊張していることが伝わらないようにしたい
コミュニケーションの場の調整	声の適切性	話が止まって不安になるが、その不安を患者にうつさないようにしたい
		緊張のしすぎだと思ったので、もう少し自信をもって実習や生活の中で話すことを意識したい
		緊張すると早口になってしまうので、ゆっくり話すことと、間を作ることを意識して関わっていききたい
		話していて、敬語がおかしいなと感じる点があったため、患者と話すときには変な力をいれすぎないようにしたい
	効果的なタッチング	実際の患者と話すときには、もっと緊張したり焦ったりして、こちらの焦りが伝わってしまうかもしれないので落ち着いて話を進めていく
		声の大きさやトーン、話すスピードについてアドバイスをいただいたので、高齢の患者と接するときに生かしたい
		声のボリュームに気を付ける
	コミュニケーションの場の把握	‘触れてくれてうれしかった’と言っていただけ話の仕方は、これからも使っていきたい
		場と環境を客観的に見られるようにする
		入室の際に、もっと周囲を見る
コミュニケーションの目的の明確化	コミュニケーション環境の調整	会話以外にも気が遣えるようにしたい
		患者が話しやすい状況を作ることが大切だと感じた
	コミュニケーションの優先順位	沈黙をなくして、患者の目的（何のために患者のところへ行ったのか）を果たせるようにする
		患者に何を一番に聞きたいのかを持って、患者の前に立ちたい
コミュニケーションの目的の明示	対象へのコミュニケーションの目的の明示	患者と話すときは、どういった目的で部屋を訪れたのかを説明してから話をする

表1 OSCEにおける1年次看護学生のコミュニケーションに関する課題からの学び (2)

カテゴリー	サブカテゴリー	実際の記述
コミュニケーション内容とプロセスの意識化	コミュニケーション方法の工夫	まずは挨拶（どうやってしたら自然か）
		最初に挨拶をすることが大切
		全体の流れをよくしていきたい
		コミュニケーションの話の広げ方や、タイミング、つなげ方を見直せた
		話す内容を工夫するようにしたい
		話の振り方とか聞き出し方とかが学べた
		Yes, Noで答えられる質問を多くしてしまっただけで、患者が話を広げられるような質問ができるようにしたい
		どのように話すと話しやすいか、どのような話をすると快く思っていただけなのかを知ることができたので、話の流れを考えながら話せるようにしたい
		処置などをすすめる際など、沈黙にならないようにしたい
		自分の話をしてもらった後に、そこから何を話していくべきか分からなくなることが多かったのですが、この経験を生かして話を続けられるコツを見つけていきたい
	コミュニケーション内容とプロセスの意識化	一つの話題で、たくさん話を広げられるようにしたい
		認知症の患者と話す機会があったら、環境みて患者の興味をひくことができるポイントをみつけない
		質問の幅を増やすために整理する
		体調や困っていることについて、もっと詳しく聞けるように工夫しようと思った
		一つの情報から、より多くの情報を引き出せるようにしたい
共感的言語の選択		患者の気持ちに寄り添って理解が深められる会話を日々意識していきたい
		今後は患者が不安に思わず、この看護師に寄り添っていいんだなと思ってもらうことが第一だと思うため、会話の中で患者が不安にならないような言葉選びをしたい
		共感が少し薄いという意見をもらい、言葉での反応を努力したいと感じた
		共感すると話題を広げられる可能性があるため、共感できるところは共感したい
		患者の表情を見て、私の提案に乗り気じゃないと分かってもその後どうしたらよいか分からなかったもので、その場合どうすべきか考えていきたい
	同意のプロセスの意識化	一つ一つの動作に、「○○します」ではなく、「○○して良いですか」と聞くようにしたい
		考えていることは止めず、まわりを見て、どうしたら良いかと考えていることを変えられるようにし、新しいヒントを見つける
		相手のことを否定しないように改善策と一緒に考えたりなど、患者を一人にせず、共に治すことを意識したい
		話の流れを利用して「○○しませんか」と同意を取りたい

表1 OSCEにおける1年次看護学生のコミュニケーションに関する課題からの学び (3)

カテゴリ	サブカテゴリー	実際の記述
対象の疾患や病状への理解	事前情報による対象の症状の予測	患者情報をしっかり読む 事前情報をもっとしっかり把握したうえで、患者とコミュニケーションをとることが大切だ 病名からどのような症状があるかを予測して、実際確かめるとポイントの高いコミュニケーションになると思う
	疾患や病状に関する情報の把握	患者の症状の現状や経過を聞くようにする
		病気と物事の理解の関係を読み取る力をつける
		病状についての情報収集をしっかりとしたい
	対象の疾患を理解した不安への対応	痛みや感覚の有無など病気によって聞くべきこと、確認するべきことがあると認識できた 患者の疾患を理解した対応をしていくことが大切だと思ったので、疾患について学んでいく必要があると思った 病気の程度について、『絶対に治る』とは言い切れないと思ったので、もっと病気について学んで、患者の不安を和らげるようになるようにしたい
生活者としての対象のニーズの把握	対象の潜在的ニーズ表出への工夫	話を認識して患者のニーズを汲み取る 楽しい話題だけでなく、困っている部分をもっと引き出して看護につなげたいと思った 患者が思っている気持ちや行動などを読み取って、行動に移したり声掛けを行っていききたい 患者がどんなことを思っているのか、どんなことに支障が出ているのか細かく聞いていたり、患者ができなくて困っていることは何なのかを情報収集できるようにしたい 話をそのままにせず、具体的に掘り下げて、患者が本当に言いたいことは何かをきちんと聞き出せるようにする 話している内容から、認知症の症状と体調不良など様々な可能性について考えられるように、思い込みで会話をしないように気を付けたい 看護師として患者へのアセスメントをしないといけないので、日常会話だけでなく、体調面、病状面に対しても質問し、具体的に聞けるようにしていきたい
		患者が、今、何が不安で何に困っているのかを考えながら、患者の話を聞く
		患者の気持ちやどのようなのか考え、共感していけるようになるために、まず患者の気持ちや思いを考えられるようにしていきたい
		身体の状態について詳しく聞くことができなかったで、身体をつらい場所や動き具合を聞きたいと思った 今後は日常生活で不便なところを聞いて、不便さ、不安を解消できるようにしたい
		アセスメントできるように、患者の状況などを意識して情報収集していきたい
	日常生活行動の尊重	患者の状況を、質問を通して理解する
		身体の状態や生活するうえで、不便・不安はないかをうまく聞き出していききたい
		物品を配置するときに患者の意見をきちんと聞く（患者が使いやすいかなど、患者が気持ちよく入院生活が送れる環境整備が重要）

表1 OSCEにおける1年次看護学生のコミュニケーションに関する課題からの学び (4)

カテゴリー	サブカテゴリー	実際の記述
対象・状況に合わせたコミュニケーションの工夫	認知機能に応じた傾聴・受容の工夫	認知症患者への援助を学ぶ
		患者や状況に合わせて、話の仕方を変えていきたい
		認知機能に障害がある方など、話がぐちゃぐちゃになったりしていたとしても、否定したりせずに、よく話を聞いてあげられるようにしたい
		見当識障害の患者には否定しないということを学んだ
	自己の援助に対する確認行動の重要性	あまり話さない患者に対しては話が途切れてしまい、気まずい空間にしてしまったため、患者に合わせた話し方ができるようにしたい
		疾患それぞれに合わせた配慮の仕方について学ぶ
		看護の視点から見て、患者の安楽を考えながら話したい 物品を配置し終わったら、その場所が本当に良いのか患者と確認する

3. コミュニケーションの目的の明確化

学生はSPとのコミュニケーションにおいて、【コミュニケーションの目的の明確化】の重要性を学んでいた。このカテゴリーは2つのサブカテゴリーで構成された。

学生は、‘患者の目的（何のために患者のところへ行っただのか）を果たせるようにする’、‘患者に何を一番に聞きたいのかを持って、患者の前に立ちたい’という「コミュニケーションの優先順位」を考えることにより、意図的なコミュニケーションが可能になることに気づいた。また、‘患者と話すときは、どういった目的で部屋を訪れたのかを説明してから話をする’など「対象へのコミュニケーションの目的の明示」をすることで、円滑なコミュニケーションにつながることを体感した。

4. コミュニケーション内容とプロセスの意識化

学生はSPとの対話を重ねることで、【コミュニケーション内容とプロセスの意識化】について学んでいた。このカテゴリーは3つのサブカテゴリーで構成された。

学生は‘全体の流れをよくしていきたい’、‘Yes, Noで答えられる質問を多くしてしまったので、患者が話を広げられるような質問ができるようにしたい’など、円滑なコミュニケーションには「コミュニケーション方法の工夫」が必要であることを実感した。また、‘患者の気持ちに寄り添って理解が深められる会話を日々意識していきたい’、‘患者が不安に思わず、この看護師に寄り添っていいんだなと思ってもらうことが第一だと思うため、会話の中で患者が不安にならないような言葉選びをしたい’など「共感的言語の選択」の必要性に気づいた。さらに、‘患者の表情を見て、私の提案に乗り気じゃないと分かってその後どうしたらよいのか分からなかったで、その場合どうすべきか考えていきたい’と対象からの同意が得られない場合の対応に苦慮する場面もみられたが、‘考えていることは止めず、まわりを見て、どうしたら良いかと考えていることを変えられるようにし、新しいヒントを見つける’ことや‘相手のことを否定しないように改善策と一緒に考えたりなど、患者を一人にせず、共に治すことを意識したい’、‘話の流れを利用して「○○しませんか」と同意を取りたい’など、柔軟で建設的なアプ

ローチを模索しており、提案したケアに対象が同意する過程である「同意のプロセスの意識化」を重視していた。

5. 対象の疾患や病状への理解

学生はSPとの対話を通して、コミュニケーションにおける【対象の疾患や病状への理解】の必要性を学んでいた。このカテゴリーは3つのサブカテゴリーで構成された。

学生は、対象とのコミュニケーションの前に‘事前情報をもっとしっかり把握’し、その情報から‘病名からどのような症状があるかを予測’する「事前情報による対象の症状の予測」の必要性に気づいた。また、予測に基づき‘患者の症状の現状や経過を聞くようにする’ことにより‘病気と物事の理解の関係を読み取る力をつける’過程である「疾患や病状に関する情報の把握」の重要性について認識した。さらに、‘患者の疾患を理解した対応をしていくことが大切だと思ったので、疾患について学んでいく必要があると思った’と疾患について学ぶことが「対象の疾患を理解した不安への対応」となり、‘病気の程度について、『絶対に治る』とは言い切れないと思ったので、もっと病気について学んで、患者の不安を和らげるようになりたい’と対象の不安軽減へのケアにつながることを学んだ。

6. 生活者としての対象のニーズの把握

学生は生活者としての対象を認識し、日常生活における【生活者としての対象のニーズの把握】について学んでいた。このカテゴリーは2つのサブカテゴリーで構成された。

学生は、‘患者が、今、何が不安で何に困っているのかを考えながら、患者の話を聞く’といった対象の思いや困難に耳を傾け、「対象の潜在的ニーズ表出への工夫」の重要性に気づいた。また、‘身体の状態や生活するうえで、不便・不安はないかをうまく聞き出していきたい’ことや‘物品を配置するときに患者の意見をきちんと聞く（患者が使いやすいかなど、患者が気持ちよく入院生活が送れる環境整備が重要）」と対象の使いやすさへの配慮といった日常生活に着目しており、「日常生活行動の尊重」について学んだ。

7. 対象・状況に合わせたコミュニケーションの工夫

2課題のOSCEを実施することにより、【対象・状況に合わせたコミュニケーションの工夫】

を学んでいた。このカテゴリーは2つのサブカテゴリーで構成された。

認知症患者のOSCEを通して、学生は‘患者や状況に合わせて、話の仕方を変えていきたい’ことや‘認知機能に障害がある方など、話がぐちゃぐちゃになったりしていたとしても、否定したりせずに、よく話を聞いてあげられるようにしたい’など、相手の能力に合わせてコミュニケーション方法を柔軟に変え、傾聴する「認知機能に応じた傾聴・受容の工夫」の重要性に気づいた。一方、片麻痺患者のOSCEを通して、‘物品を配置し終わったら、その場所で本当に良いのか患者と確認する’といった‘疾患それぞれに合わせた配慮の仕方について学ぶ’ことが、適切なコミュニケーション手段を用いた‘自己の援助に対する確認行動の重要性’への理解につながった。

Ⅳ. 考 察

コミュニケーションを重視した看護技術のOSCEにおいて、研究結果から抽出した7カテゴリーを総合的に検討した結果、5つの教育への示唆が得られた。それらについて考察する。

1. 対象との信頼関係構築に影響を与える非言語コミュニケーション

対象との信頼関係の構築に影響を与える非言語コミュニケーションから、【非言語コミュニケーションの効果】と【コミュニケーションの場の調整】を生成した。

コミュニケーションには、さまざまな伝達経路（チャネル）があり、相互に関係しながら作用している。その分類として、主に言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションがあり、さらに、非言語コミュニケーションは、音声を含む音声的と含まない非音声的コミュニケーションに分類される（石川，2022）。非音声的コミュニケーションとして、①身体動作、②接触行動、③身体的特徴、④空間的距離・位置、⑤人工物、⑥環境の6つの要素があり、これらを活用することでコミュニケーションがより効果的になる。学生は、声の大きさ、トーンなどによる気遣いである音声的コミュニケーションと、笑顔や緊張など表情やスキンシップによる接触行動である非音声的コミュニケーションから成り立つ【非言語コミュニケーショ

ンの効果】への認識を深めたことが示唆された。また、患者との対話環境を調整することの重要性を学び、非音声的要素の環境である【コミュニケーションの場の調整】が円滑で建設的なコミュニケーションに大きく寄与することを、自己の課題を通して認識したことが示唆された。

形成的評価としてのOSCEにおいて、SPや評価者からのフィードバックにより、学生が「柔らかい表情での対応」や「声の適切性」などの非言語コミュニケーションが対象に与える影響の大きさを認識できたことは有意義であったと考える。また、学生は自己の非言語コミュニケーションスキルの課題を把握し、そのスキルを向上させる貴重な機会となっていることが示唆された。非言語コミュニケーションスキルの習得にはフィードバックを活用した継続的な学びが不可欠であり、それを支援する学修環境の提供が必要である。

2. コミュニケーションの方向性の明確化および意識化

コミュニケーションの方向性の明確化および構造化から、【コミュニケーションの目的の明確化】と【コミュニケーション内容とプロセスの意識化】を生成した。

看護師にとって、コミュニケーションは疾患の理解や家族関係や社会的役割の把握、治療に関する情報提供など様々な目的のために活用される重要なスキルである（中谷，2015）。OSCEを通して、学生は【コミュニケーションの目的の明確化】により、意図的なコミュニケーションによる効果的な情報収集が可能となることを学んでいた。また、【コミュニケーションの目的の明確化】は【コミュニケーション内容とプロセスの意識化】にとってコミュニケーションを方向づける点で重要であることを認識した。不安の傾聴、病状や治療内容、退院後の注意点の説明など、コミュニケーションを行う目的を意識することにより、学生は「コミュニケーション方法の工夫」や‘対象の気持ちに寄り添い、理解が深められる会話を意識する’ことや‘対象の不安に配慮した言葉選び’など対象の立場を考慮した「共感的言語の選択」を模索し、「同意のプロセスの意識化」を重視する姿勢で対象の心情を推し量りながら適切なコミュニケーションの在り方を考えていた。トラベルビーは

コミュニケーションを変動的な相互のプロセスとしてとらえ、その達成すべき目標は人を知ること、病人の看護上のニーズを確かめ満足させること、看護の目的を遂行することであると述べている（岡谷，2015）。コミュニケーションの目的の明確化は、効果的なコミュニケーション手段の選択、対象理解のための相互作用における指針であり、学生がこの重要性を認識できたことは質の高い看護実践への第一歩であるといえる。今後も、学生が目的意識を持ち、対象と信頼関係を構築しながら相互理解を深めるコミュニケーションができるように支援していく必要がある。

3. コミュニケーションにおける相互作用による対象の理解とニーズの把握

コミュニケーションにおける相互作用による対象の理解とニーズの把握から、【対象の疾患や病状への理解】、【生活者としての対象のニーズの把握】を生成した。

『生活者』とは、疾病や障害を抱えながらも、個の歴史の中で培われた自らの価値観や生活信条に基づいて行動しようとする主体的な存在である（菊池，2022；吾郷，2009）。看護実践において、その人の健康状態だけに着目する『患者』としてではなく、価値観や人生観などを持つ『生活者』として関わるのが重要である（日本看護協会，2023）。本研究におけるOSCEにおいて、学生は対象と対話をしながら環境整備をする中で対象の意向を確認し、快適に過ごすだけでなく自立して生活できる環境の提供を模索していた。学生は身体状況と日常生活が連続していることに気づき、「日常生活行動の尊重」の重要性を理解し、「対象の潜在的ニーズ表出への工夫」を促すことにより真の【生活者としての対象のニーズの把握】につなげることができるとを学んだ。

OSCEを通して、学生は個別性のある看護技術である「対象の疾患を理解した不安への対応」にとって、コミュニケーションの前に「事前情報による対象の症状の予測」をし、コミュニケーションによる対象からの情報収集を通して「疾患や病状に関する情報の把握」をすることの重要性に気づいた。看護師の臨床判断において、事前情報の適切な解釈が意思決定プロセスの出発点となることが示唆されている（服部，2021）。また、

対象理解において、対象の感情や思考、療養環境における状況や文脈から対象の内面と外的状況を多角的に解釈する能力が求められている（磯野，2023）。今後、看護基礎教育において、専門知識による事前情報の解釈力を高めるための教育と、対象を多角的にとらえた生活者としての対象理解ができる教育とを統合した教育が必要であることが示唆された。

4. 個別性を理解したコミュニケーション

個別性を理解したコミュニケーションから、【対象・状況に合わせたコミュニケーションの工夫】を生成した。

コミュニケーションの過程には、コンテキスト、送り手、ノイズ、メッセージ、フィードバック、チャネル、受け手の7つの構成要素が存在し、これらは対象者独自のコミュニケーションの意味づけに影響を与えている（杉本，2005）。送り手である看護師の役割は重要であり、受け手である患者の年齢や発達段階、言語の認知能力および知覚能力に合わせることを求められる（日本看護科学学会，*n.d.*）。本研究では、軽度認知症患者を対象としたOSCEを実施し、学生は「認知機能に応じた傾聴・受容の工夫」の重要性を学んだ。また、片麻痺患者を対象としたOSCEでは、学生は対話をしながら環境整備をする中で対象の意向を確認し、「自己の援助に対する確認行動の重要性」によって対象が快適に過ごすだけでなく自立して生活できる環境の提供を模索した。看護場面ではコミュニケーションの受け手である対象個々の特性を考慮し、その反応を確認しながらコミュニケーションを調整する姿勢が求められる。今後、さらに多様化する対象のニーズを尊重したケアを提供するために、OSCEを活用した実践的なコミュニケーション教育の充実が必要不可欠である。

5. 看護基礎教育におけるOSCEによる評価の有効性

本研究のOSCEに参加した学生は学士課程1年次であった。このような看護基礎教育の初期段階ではありながらも、OSCEにより看護におけるコミュニケーションの基盤となる概念を学んでいた。SPによるコミュニケーション演習は臨場感を高め、対象に寄り添う援助者としての姿勢を育成していることが示唆されている（荻，2007）。看護基礎教育における早期からのコ

コミュニケーションを重視した看護技術のOSCEによる実践的な評価は、学生のコミュニケーションスキル向上にとって効果的であると考えられる。今後、段階的かつ反復的に導入した教育プログラムを策定し、学生のコミュニケーションスキルをOSCEにて評価する体系的育成方法の必要性が示唆された。この教育プログラムの構築により、理論と実践をシームレスに結びつけた総合的な看護実践能力を育成することが望まれる。

本研究では、低学年の学びとして『生活者の視点』が抽出された。先行研究では、領域別実習において生活者としての対象理解に関わる学びの視点が明らかであるが、低学年におけるOSCEによる学びは対象理解およびニーズ把握にとどまっていた(服部, 2020; 菊池, 2022; 三味, 2016)。コミュニケーションを重視した看護技術を評価するOSCEにより、低学年の段階から生活者の視点を育成する可能性が示唆された。

6. 本研究の限界

本研究の対象者は50名であり、結果の一般化には限界がある。また、看護学学士課程1校の結果であり、限定された結果である。今後、調査対象校を複数校に広げ、教育内容の違いが結果に与える影響を検討する必要がある。

V. 結 論

コミュニケーションを重視した看護技術を評価するSP参加型OSCEにおいて、看護基礎教育における1年次看護学生50名のコミュニケーションに関する自己の課題に対する学びを検討し、以下の結果を得た。

1. OSCEにおける看護学生のコミュニケーションに関する自己の課題に対する学びとして、【非言語コミュニケーションの効果】、【コミュニケーションの場の調整】、【コミュニケーションの目的の明確化】、【コミュニケーション内容とプロセスの意識化】、【対象の疾患や病状への理解】、【生活者としての対象のニーズの把握】、【対象・状況に合わせたコミュニケーションの工夫】の7カテゴリーが生成された。
2. OSCEにより、学生は看護におけるコミュニケーションの基盤となる概念を学んでいた。看護基礎教育における早期からのコ

ミュニケーションを重視した看護技術のOSCEによる形成的評価は実践的な教育につながり、学生が看護実践を行う際のコミュニケーションスキル向上を導くことが示唆された。

謝 辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は、本研究はJSPS科研費JP18K10637の助成を受けたものである。

利益相反

本研究に関して、開示すべき利益相反はない。

引用文献

- 馬場香里 (2021) : コミュニケーション, 助産学講座5 助産診断・技術学I (堀内成子, 他 編), 78-8, 医学書院, 東京.
- 藤野ユリ子, 吉川由香里 (2021) : 患者とのコミュニケーション場面を想定したシミュレーション演習の実践, 福岡女学院看護大学紀要, 11, 27-34.
- 服部貴夫, 阿部恵子, 山中 真, 他 (2021) : 急性期入院患者の異常を察知する診療看護師 (NP) の臨床判断の分析, 日本NP学会誌, 5(1), 31-42.
- 服部智子, 山本加奈子 (2020) : 実習前OSCE後の振り返りシートからみる学生自身が捉えた学び, 日本赤十字広島看護大学紀要, 20, 25-33. DOI: 10.24654/jrchen.2020.03
- 肥後すみ子, 奥山真由美, 太湯好子 (2005) : SP導入によるコミュニケーション演習に主づく学習効果と教育技法の評価, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 12(1), 33-43.
- 堀美紀子, 村松千鶴, 淘江七海子 (2004) : 模擬患者を活用した教育方法の検討 ―学生の評価能力の育成に向けて―, 香川県立保健医療大学紀要, 1, 89-96.
- 堀美紀子, 松村千鶴, 淘江七海子 (2003) : 模擬患者を導入したコミュニケーションスキルトレーニングの学習効果, 香川県立医療短期大学紀要, 5, 105-114.
- 石川ひろの (2022) : 対人コミュニケーション, 系統看護学講座―基礎分野 人間関係論 (石川, 他 編), 84-91, 医学書院, 東京.
- 磯野さよ子, 前田ひとみ (2023) : 「看護学生のコミュニケーションスキル」の概念的枠組み, 熊本大学医学部保健学科紀要, 19, 1-8.
- 柏木ゆきえ, 小林由美子, 野里 同, 他 (2021) : OSCEを活用したフィジカルアセスメントの技術試験の取り組みと学生の振り返りからみた課題, 岩手看護学会誌, 15(2), 70-77.

- 菊池真弓, 若澤弥生 (2022): 臨地実習における看護学生の「生活者」の理解に関する文献検討, 了徳寺大学紀要, 16, 285-296.
- 吾郷ゆかり, 吉川洋子, 松本玄智江, 他 (2009): 看護基礎教育における「生活者を理解する視点」—家庭訪問実習と病院実習後の自己評価より—, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 3, 77-83.
- 小西美里 (2013): 日本の看護教育におけるOSCEの現状と課題に関する文献レビュー, 上武大学看護学部紀要, 8(1), 1-8.
- 厚生労働省 (2019): 看護基礎教育検討会報告書. <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>
- 厚生労働省 (2011): 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書. <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001316y-att/2r985200000131bh.pdf>
- 黒澤昌洋, 山本恵美子, 山中 真, 他 (2021): 高齢模擬患者参加型演習に参加した1年次看護学生のコミュニケーションに関する8ヶ月後の認識, 愛知医科大学看護学部紀要, 20, 19-29.
- 宮脇美保子 (2021): 身近な事例で学ぶ看護倫理, 43-48, 中央法規, 東京.
- 中谷章子, 井田政則 (2015): 看護コミュニケーション尺度作成の試み—看護スタッフおよび患者・家族に対する看護師のコミュニケーション—, 立正大学心理学研究年報, 6, 53-66.
- 日本看護科学学会 看護学学術用語検討委員会 (n.d.): JANSpedia—看護学を構成する重要な用語集—コミュニケーション. <https://scientific-nursing-terminology.org/terms/communication/>
- 日本看護科学学会 看護学学術用語検討委員会 (n.d.): JANSpedia—看護学を構成する重要な用語集—看護技術. <https://scientific-nursing-terminology.org/terms/nursing art/>
- 日本看護協会 編 (2023): 改訂版 看護にかかわる主要な用語の解説, 13-14, 日本看護協会出版会, 東京. https://www.nurse.or.jp/nursing/assets/yougo_kaisetu_202311.pdf
- 荻あや子, 肥後すみ子, 奥山真由美, 他 (2007): SP導入によるコミュニケーション演習が臨地実習に及ぼす影響, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 14(1), 29-39.
- 岡谷恵子 (2015): ジョイス・トラベルビー, 看護理論家の業績と理論評価 (筒井真優美, 他 編), 209-221, 医学書院, 東京.
- 三味祥子, 吉田和美, 山本加奈子, 他 (2016): 2年次看護学生が基礎看護学実習前OSCEをとおして臨地実習で実感したOSCEの学習効果, 日本赤十字広島看護大学紀要, 16, 89-97.
- 杉本なおみ (2005): 改訂 医療者のためのコミュニケーション入門, 16-21, 精神看護出版, 東京.
- 鈴木富雄, 阿部恵子 編 (2025): よくわかる医療面接と模擬患者 (第2版), 38-44, 名古屋大学出版会, 愛知.
- 鈴木富雄, 阿部恵子 編 (2025): 前掲書, 194.
- 高島 利, 荒尾博美 (2021): 看護系大学生を対象とした客観的臨床能力試験 (OSCE) の現状に関する文献レビュー, 熊本保健科学大学研究誌, 18, 43-56.
- 玉木敦子 (2017): 今どきの看護学生をどう育てるか, 神戸女子大学看護学部紀要, 2, 1-10.
- 津田泰宏, 瀧井道明, 土井智生, 他 (2023): OSCE形式を利用したフィジカルイグザミネーション実技試験実践報告, 大阪医科薬科大学看護研究雑誌, 13, 90-95.
- 山本 健, 高田公彦, 増田 豊, 他 (2019): 模擬患者参加型コミュニケーション実習が薬学生に与える教育効果について, 昭和薬科大学紀要, 53, 1-10.

受付日: 2024年10月28日

採択日: 2025年3月11日